

一休という多面体  
その〈像〉と語り

# 中世に「語られる」 一休の像

飯島 孝良

一休は、室町期から破天荒で規格外の存在だと知られていたようである。本連載五月号でも触れたが、直弟子の編纂によって成る『一休和尚年譜』応永二十九年「二四二二」条には、言外宗忠ごんがいうちゆう三十三回忌に際して見すほらしいボロ着で参列したとされる。そして「和尚が亡くなったのち、自らの法は誰に託すのか」と問われた一休の師・華叟は、「風狂と道いまとうと雖もこの純子あり」——「風狂と言われているが宗純がいる」——と評価したと記されている。但し、華叟の高い評価が年譜に伝えられている点を考慮すると、これには編者の直弟子たちによって師を高める意図が反映されているとも考え得る。

また連歌師の心敬しんけい（二四〇六―一四七五）

は、「おなじ禅門修行の明匠とて、数しらずきこえ侍はべれども、今の世に行儀も心もかはり侍ると聞えぬるは一休和尚也。万よろのさま世の人にかはり侍ると人々かたり侍り」（二〇ひとり

ごと」と評している。同時代に、一休は既に「行儀も心もかはり侍る」と語られていたのである。

更に、東福寺の禅僧である季弘大叔（一四二一〜一四八七）の『蕉軒日録』にも、一休の名がいくつも見出せる。例えば、一休没後まもない文明十六年「一四八四」十一月二日条には、本連載八月号で取り上げた一休頂相の自賛（酬恩庵一休寺藏）が、一部改変のうえで言及されている。引用された「詩情禅共無能、龍宝山中滅大燈、盲女艶歌欺楼子、虚堂七世慕直僧」の一句から、一休が自身を「慕直」——泥臭く野卑であるが独立不羈で孤高の存在——だと表現していたことが知られていたとみてとれる。また、文明十八年「一四八六」七月十七日条には、一休と深い交流があった南江宗沅（一三八七〜一四六三）の柿本人麻呂賛と並べて、「名ニシホフ熟柿クササヨ墻ノモト二人丸ナガラ面ハ赤人」という

一休作とされる歌を記載している。「噂どおりの酒臭さだよ、垣のもとに佇むのは（柿本）人麻呂だが、顔は赤い人（山部赤人）だ」というのは、一見すると戯れ歌にもみえるが、『超仏越祖』を旨とする臨濟禅から考えれば、人麻呂影供などにみられる歌道における当時の人麻呂神格化へ痛烈な批判と冷やかしをぶつけたものとみるべきであろう。こうした同時代の記録にも、一休を批判精神に溢れる存在と看做していたことがうかがえるであろう

### 【注】。

また、禅籍の抄物（本文に仮名書きで注釈を加えたもの）である駒澤大学図書館蔵『臨濟録抄』（異本に足利学校遺跡図書館蔵本、叡山文庫所蔵本など）には、一休の大悟にまつわる逸話を取りあげられている。

一休純蔵主は花叟に参した。西近江堅田の祥瑞庵と云処に花叟御入有た。ちと医師をめされた。有時京へ茶を買いに上せ

られた。茶屋の家へ入りさまにしきいに  
 けつまづいてころばれた。其時香巖樹上  
そのとききようけんじゆしやう  
 の話に徹せられた。其ま、帰て参に上ら  
 れた。花叟茶を御尋有たれば、「畏た」  
 と云て、やがて京へ上られた。花叟の侍  
 者を喚で「をれの天目にて茶を一服まい  
 らせよ」云仰せた。「是が印可ぢや」と云。  
 (駒澤大学文学部国文学研究室編『禅門  
 抄物叢刊』第九、汲古書院、一九七五  
 年、四七〜四八頁、引用に際して表記  
 やルビを調整)

一休とその悟りには茶との因縁があることを  
 示唆するとともに、『自戒集』『二休和尚年譜』  
 ではあれほど印可を忌避したとされる華叟と  
 一休との間で、天目茶碗に淹れた茶を印可代  
 りに授受したことが記され、師資相承を旨と  
 する禅道と茶道をことさらに印象付けるよう  
 な語りとされているように思われる。

この逸話については、更に藤原惺窩ふじわらせいこ(一五

六一〜一六一九)の口述を林羅山はやしらざん(一五八三  
 〜一六五七)が記した随筆の『梅村載筆』が  
 ほぼそのまま引用しており(『日本随筆大成』  
 第一期第一巻、吉川弘文館、一九七五年、四  
 頁)、京都五山から還俗して禅宗を批判した  
 朱子学者の知的背景が窺える。文化的な観  
 点からいうと、羅山は当時の大徳寺を牽引し  
 ていた江月宗玩かうげつそうがん(一五七四〜一六四三)らと  
 も交流があった。こうした交流の背景には、大  
 徳寺派の禅僧と文人・茶人との交流する場が  
 薪村(いまの京都府京田辺市)の酬恩庵一休  
 寺だったことも関わったように考えられる。

〔注〕これについては、岡雅彦『一休ばなし』とんち小  
 僧の来歴(平凡社、一九九五年)なども参照。

飯島 孝良(いじまたかよし)

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本  
 宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史  
 からみる禅文化の諸相』(ペリかん社)ほか。